

「經濟野話」(連載その四)

(九) 貿易論

或る人曰く「經濟組織の理想から謂えば、直接生産、直接消費である、故に商業とか、商人とか謂うものは、存在の必要が無いのである」と。蓋し従来の学説に従うと、「商人は商行為を業とする者」であるとせられて居るから、或は斯る議論も出て来るのであろう。併し、商人と云う階級は、現在に於ても将来に於ても、其經濟組織に、決して不必要な階級では無いのである。何となれば、商人は商行為の媒介者では無いが、物品の評価人であるからである。

惟うに生産者と謂う階級と、消費者と謂う階級とは、本来其利害關係に於て相容れざるものである。従つて若し此両者が相互対立して、其各自の利益を主張するときは、吾々經濟社会に於ては、争議が絶えず、之が為め、或は生産者側が不当に利得する事があり、或は又之に反し、消費者側が過当に利益をする事があり、或は又時として、其價格の協定が出来ないが為めに、例えば生産者側は其製品を過剰にストックする事となり、止むなく或は投売を為し、遂には破産の悲運を招く窮境に陥り、其結果經濟社会は、絶えず混乱状態に陥るに到り、吾々の社会は常に脅威せらるる事となるのである。故に商人なる階級が其間に介在し、公平に生産者側の製品を評価し、以て需要者側に之を引

争を為し、其結果、三党対立して、何れの党派も絶対多数を擁する事が出来ず、遂に労働党が自由党の援助を得て内閣を組織するに至つたのである。然しながら、此政戦の跡を辿つて顧みるに、私は此等の争議は、やはり一の党人の党争であつて、失業者の増加する其真因を究めたものでは無いように思う、蓋し英国で失業者の増加したのは、自由貿易の為めでもなく、又保護関税を課しても、産業国有を断行しても、矢張り同じ事で、其原因は他に存在するからである。詳言すれば失業者増加の原因は、ドイツや、ベルギーや、其他の大陸諸国の貨幣の値が下つて居るから、鉄鋼を始め総ての工業生産品の輸出は、此等の貨幣の価値の下がつて居る国の生産品に圧迫せられ至る處に於て競争に敗れた事と共に、他方、従来英国より大陸諸国に輸出して居つた品物が、此等貨幣価値の下がつた国へ、為替の關係で売れなかつた事との点である。斯る有様であるから、英国の産業は衰え、失業者は増加するのを止むなきに至つたのである。

米國に於ては、何うかと云うに、流石に天の恵の豊かな、若い国だけあつて、産業も旺盛であり、失業者も最近は何れも余程少なくなつたようである。然し米國は寧ろ農業国と云つてもよい国柄で農産品の豊凶は常に其經濟社会に影響を与えるものである。而して此米國の農産品を欧州へ売らんとしても、米國の貨幣の値が余り高くて、御得意先の貨幣の値が低いので、非常に安く売らねば困るのである。故に米國の農民側は、不斷に政府に迫つて救済の途を求めて居る状態である。そこで米國政府も多年の国是であるモンロー主義を墨守する事も出来ず、独逸賠償委員会に民間銀行家を派して、賠償問題に参与せんと試みて居る。是は換言すれば欧州の金の値を上げて、貸金も回収し自國の輸出貿易を助長し、農民を援護せんとするの意味に過ぎないのである。

以上の如く英米先進國の状態を観察すると、総ての問題は歸して一

渡すの使命を為すものであつて、此使命を完了するの必要上、其自己の評価額と需要者側のそれとが一致を見ない時には、自己の危険と計算とを以て其製品を貯蔵し、適當の時期を待つて之が売捌を為すのである。故に生産者側に取つては、之に依つて生産の仕事を持続する事が出来ると共に、他方消費者側に取つても、直接に争を為す事を避け、自己の適當な需要期に之が買入を為し、其満足を得るの結果となるものである。畢竟商人なる階級があつて、両者の間に介在し、公平に製品の評価を為し、其実際の需要關係を調節すればこそ、茲に初めて吾々經濟社会の安固なるものが保持せらるるに至るのである。理想の商人としての要件である所の「投機又は思惑をしない事」とか、「華美に流れず誠実を旨とする事」とかの格言は、畢竟此商人なるものが公平なる評価人であればこそ、其使命を完うする上に於て必要なものであつて、役人が法に準拠して仕事をするのと同様に、商人も亦此公平なる評価人たる自己の職務に準拠して、商売を為すべきものである。

之を要するに商人なる階級は、現在に於ける經濟組織に於て必要な階級であつて、此点は國際商業即ち外國貿易に於て、殊に其然る所以を有するものである。私は之を否定する時代は吾々の頭で考へて到底来ないものと信ずる。

一一

先般英國で総選挙が行われた。選挙の点は失業の防止と云う点であつて、之に対し、保守党は保護貿易により英國内の産業を發達せしめ、以て失業者を救わんと主張し、自由党は其コブデン以来の伝統的主張である英國の自由主義を捨てるのは、大英帝國の衰滅を招くものであると唱道し又労働党は産業の国有、資本課税を以て失業者を救うの外に途なしと論じ、此三党が巴万字に入り乱れて、近來稀なる激烈な競となる。即ち他國の金の値の低いのに翻弄せられて居るのである。故に之を他の点から観れば、國際的に悪貨が良貨を駆逐して居るのである。即ちグレッシャムの法則が國際的に行われて居るのである。故に私は此実状から考へて、悪貨の流通する國の生産品が結局良貨の流通する國の生産品を駆逐し、金の値の低い國が、金の値の高い國を圧迫し、金の値の高い國の産業は遂に亡びると云う事になるのである。

一二

世界に於ける貿易國として我國の地位を考えるのに、広表僅かに四万方里の島國で、人口六千万、年々七十萬の増加率を抱擁して、然も衣食住の原料一として天与の富源の之を養つて充分なものがないのである。そこで南方諸國を考えるのに、此方面は既に多く、欧州先進國の版図に属し、殆ど一指を染むるの余地がない。又支那方面を観ると長江方面は或は富源開發の余地尚多く在するものがあるかも知れぬが、此方面もよくよく觀察すると、人口は可成り稠密で、且つ其物資の如きも、ゴマが三八、〇〇〇噸、油類が五〇、〇〇〇噸、穀類が一〇〇、〇〇〇噸、鉄類が三五〇、〇〇〇噸等が其対称物として残された主要なもの、そんな無限な資源があるわけではなく、又余剰もない。又広東、福州方面は勿論、青島、天津、牛莊方面も左程大した資源はなく、同時に我製造工業品の販売市場として注目する程の価値は少ないのである。

斯く觀じ来れば、東も西も南も三方塞がりの状態である。然らば従來看過して来たった北は如何と云うに、北滿から沿海州に至る林業、北滿、シベリヤの小麦、大豆、其他の農産物等の開發、輸出、運送は是非共我日本人の手に依らねばならぬのである。

シベリヤと云えば不毛の広野の様に感ずるけれ共、中々そうではな

い。実に沃野千里、森林処々に鬱蒼として茂り、実に天恵の地である。シベリヤが如何に肥沃であるかと云う事は、黒龍江流域一帯、ブラゴエチエンスクを中心とする地方の如きは、実に百三十六ゾロトニークの小麦を産すると云う事実から考えても明白である。或る専門家の議論に依ると、凡そ土地の肥瘠を定めるには、其土地に産する穀物の一定容量の有する目方の大小に依るのが最も適當なる方法であつて、此百三十六ゾロトニークと云うのは一ブツセル六十二封度余に該当し、此比例は世界何れの国の小麦よりも目方が重いのである。故に此地方は吾々日本人から観て、実に立派な宝庫である。

私が茲に日本の宝庫と云つても、それは決して、併呑とか占領とかを意味するものではない。又實際其必要もないのである。蓋し英国が印度、エジプト、カナダに依つて富を成したのは、此等の地よりも取立てる税金と、其統治に要する諸費用を控除し、其残金を儲けたと云う意味ではなく、寧ろ此等の地に産する物資の売買、資源の開発、物資の運送等に依つて、利益したのであつて、此点から云えば、富を成すのには敢えて領土の占領の必要は無いものであるからである。故に吾々は此シベリヤなる日本の理想的宝庫を充分に開発し、之が爲めに其宝庫の出口である大連と浦塩と黒龍江の海運の發展に、もつと力を注がなければならぬのである。

滿州の如きも亦無限の広い沃野である。而して此方面の物資も吾々の注目に値する所のものであつて、殊に英国の取つた政策を踏襲し、此物資の売買、運送に従事したならば其儲けは莫大なものである。畢竟吾々日本人の富源開発の地は、南にも非ず、又東にも非ず、又西でもなく、唯だ唯だ此北方にあるのみである。

然しながら、又一面翻つて遠く之を考へるのに、黒海沿岸は、之も亦世界の宝庫であつて、穀類、石油、其他の物資の産出は莫大なものも、運送に依る利益と云うものは、可成り重要なものである事が分かるのであろう。

英国人は、印度の棉、ガンニーのみでなく、濠州カナダの小麦を同様の方法で運送し、之に依つて、其利益を占めた。英人の現在の国有の源は凡て植民地に在るが其方法は前述の如きものである。此先進国の例から考へて、如何に運送業が国富増進に必要であるかが知れるであらう。

唯だ日本人は其天然の位置に於て、甚だ損な立場に在るのである。即ち英国の如きは其植民地が、印度にしてもカナダにしても、濠州にしても、中々遠い所に在るから、運送業なるものが、充分發達する当然の原因が存して居つたのであつた。詳言すれば、其本国と植民地とが遠隔の地に在つた關係上多くの船腹を要し、海運国として隆盛に赴くべき自然的原因を持つて居つた。然るに我国は英国と同じく島国ではあるが其植民地とは近接し、航海の距離も短いので、英国の様に海運を發達させるのには、相当困難な事情があるのである。故に我国の海運業を盛にし、又同時に其国富を増加せしめんとするならば、何うしても遠隔地に植民地を求むるの必要があるのである。此見地からして一方に於て滿州及びシベリヤ方面の物資を、商取引の力に依つて欧州方面に売込むと共に、他方に於て南米又はアフリカ沿海に植民地を設け、即ちパナマとスエズの内側に我国の植民地を建設し、また同時に黒海方面に其の物資の源を求め、以て海運業を勃興せしめて、大に此等地方の物資を開発しなければならぬのである。

五

要するに我国の貿易は今後何れの方面に發展すべきか、又如何なる方法に依つて、之を隆盛ならしむるか云うに、それは勿論、国内官

で欧州の富源であり、又之を中心として幾度か欧州の戦争が開かれたのである。而して独逸は従来欧州の北部に蟠居し、此中心的富源の物資が欧州各国に出るを遮断し其富の力を左右して居つたのであつたが、今や独逸の失脚によりて、此世界無限の宝庫も亦世界的に開放せられたのであるからして、吾々日本人は此機会に於て、此方面の富源開発に志さねばならないのである。而して此等の北シベリヤ、滿州又は黒海沿岸の富源開発には、何が必要であるかと云えば、それは先ず運輸業奨励と、其実権を獲る事とである。故に、今順序として運輸業の必要に就いて少し述べて見よう。

四

凡そ運輸業即ち船舶又は鉄道輸送業なるものが、富源開発に如何に重要な關係があるかと云う事に就いて、英国の印度に於ける植民地経営法の跡を考へるのに、英国人は印度に於ける物資を、其自己の船舶と自己の経営による鉄道とを以て本国に輸送したのであるが、其棉とかガンニーバッグ、穀類とか云うものが運送せられた数量は可成り大きなものであつた。そして此等の物資を運送するには、既に其商売に於て儲けた多くの利益以外に、運賃の利益を獲、保険料及び手数料を儲け、又内地鉄道運賃に於ても大に儲けて居るのである。一生懸命に一年間印度人に働かして生産した物資の利益は、斯くの如くにして英国人の懐中を肥やしたのである。

大連の大豆一噸の価が、仮にロンドンで一〇〇円であるとすれば、其産地から大連に出る鉄道運賃、ロンドン迄の運賃、保険料、手数料等は、殆ど四十円位のもので、値段の三分の一に当たるものである。

然も、大豆一噸の生産には多数の人間が一年を要するのに反し、運送は少数人が僅かに二ヶ月で完了するのである。此卑近な例から考へて民の一致協力に依つて、輸出の奨励を助成すると共に、又一方では我國の貿易を根本的に發展せしむる爲め、其物質の源を北方又は遠く西方黒海方面に求め、運送業を興し、国富の増加を計るべきである。我國の如く土地狭くして人口多き國に於ては、其物資に制限があつて、無から有を生ずる事は到底困難である。故に寧ろ、其天然に恵まれた物資の豊富な地方に、其有を求めなければならぬ。唯だ単純な努力のみでは駄目である。

經濟野話 (完)

目次

- (一) 經濟史眼の必要……………(一)
- (二) 国字の經濟的改良……………(一九)
- (三) 米の經濟的地位……………(四一)
- (四) 物価論……………(七六)
- (五) 金利論……………(一〇四)
- (六) 通貨論……………(一二三)
- (七) 金輸出禁止論……………(一五七)
- (八) 我國經濟界の現況に就て……………(二七六)
- (九) 貿易論……………(二九一)

【編集室より】

金子直吉翁の著書「經濟野話」は七十号より掲載してきましたが、本七十三号で終了させていただきます。
なお、著書の中より(二) 国字の經濟的改良、(四) 物価論、(五) 金利論、(六) 通貨論、(七) 金輸出禁止論、(八) 我國經濟界の現況に就ては省略しました。